

(3) 読書・映画

一中在学中は読書の対象が児童文学から文学作品へと移っていった。入学時は『少年倶楽部』や佐藤紅緑の「あゝ玉杯に花うけて」(1927~28年)を愛読していたが、やがて『世界文学全集』などに触れはじめた。学生の必須読書であった夏目漱石などは『漱石全集』を中学校時代にあらかじめ読破してしまった。ほかの生徒と異なる点があるとすれば、兄の影響で読みはじめた『新青年』であろう。小酒井不木や江戸川乱歩の探偵小説を皮切りに、ポーやコナン・ドイルなど英米文学のおもしろさに目覚め、『アッシャー家の崩壊』『ザ・ブラック・キャット』『シャーロックホームズの冒険』を原文で読みはじめた。3年次(1928年)には『グリーン家殺人事件』の原書を買って徹夜で読むほどに傾倒した。しかし母に見つかり、『新青年』は没収されてしまった。

読書と並行して小学校時代から続いていたのが映画趣味である。一中の入学祝いに高級映画館の「武蔵野館」で鑑賞した『ポー・ジェスト』(H・ブロン監督、弁士徳川夢声、画像)は丸山に深い感銘を与えた。徳川夢声の名調子は、サイレント映画末期の弁士の中で



異彩を放っていた。丸山は埴谷雄高との対談で次のように回想している。

サイレントの末期には、世界的にもドイツの表現派とか、凄いのがあったけども、あれがまた日本へはいつてくると、徳川夢声なんていう天才がいてね。『カリガリ博士』などは、夢声の説明と離れてはぼくのなかにはないんだね。……夢声をはじめて、シンクロナイゼーションと叫ぶといいか、本当に画面と合ったリアルなセリフでしゃべるやり方をはじめた。……

『ポー・ジェスト』は何回も映画化されたけど、ぼくは最初のサイレントのがいちばんいいと思うね。……いちばんはじめに、昔だから長い字幕が出るでしょ。それを夢声が淡々と訳してゆく、……「さりながら兄弟の間の愛情は星のごとく常に燦然たる光を放つのであります」。そこから話が始まるんだ。そういうのを、まだニキビも出ない中学一年生がきいてね、ああ男女間の愛は、なるほど月のごとく満ちる時もあり、欠ける時もあるんだなってことを、そこで教わるわけだね（笑）。(「文学と学問」)

丸山は徳川夢声と「武蔵野館」について、「映画の「芸術性」をはじめて私に感得させた恩人であるだけでなく、「西洋音楽」に私を親しませてくれた点でも、日比谷野外大音楽堂における海軍軍楽隊の演奏と並ぶ魂の教師であった」と回想している。しかし、「武蔵野館」の入場料は高く、学生が頻繁に通えるような場所ではなかった。代わりに丸山が足しげく通ったのが「芝園館」

である。

中学校時代、丸山は授業を「エスケープ」して「芝園館」に通いつめた。特にジャネット＝ゲイナーにご執心だった。しかしあるとき、「芝園館」の半券が母に見つかり、塾をサボって映画館に通っているのがバレてしまい、「兄さんはもうしょうがないと思っている。あんただけは信用しとった」と萩の訛り交じりに叱られてしまった。

一方、映画に比べると戯曲に対する関心は薄かった。『日本戯曲全集』を耽読し、3年次の頃には同人誌に戯曲を書きもしたが、本格的に演劇を観はじめたのは大学時代のことだった。

映画をはじめとする文化は、時代の変化と無関係ではありえなかった。そして、満洲事変前の中学校時代にひととおり当時の文化に触れていたために、徐々に風向きが変わっていったその後の世の中を相対化して捉える視点を丸山はもつことができたのである。

中学生時代は、ちょうど宝塚と松竹少女歌劇と両方でレビューがはじまって、並んで一斉に足を上げるダンスとか、『モン・パリ』（1927年初上演）なんていう、一種のミュージカルが流行りだしたころでした。満洲事変前の爛熟した、大正デモクラシーの続きじゃないですか。思想的にいうと高等学校に入ったときから反動に入るのですけれども、中学時代から、昭和の

はじめの最も爛熟した、頽廃も含んだ文化を一応、経験しえたことがよかったと思うのです。だから、新劇なんかも含めて、だんだん時局に適応していく過程が、よく観ているだけに、ずっとたどれるわけです。(『丸山眞男回顧談』上)